

遠州病院年報と学術講演会

メタデータ	言語: jpn 出版者: 静岡県医療機関図書室連絡会事務局 公開日: 2016-12-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 水上, 泰延 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/3060

遠州病院年報と学術講演会

JA 静岡厚生連遠州病院 病院長 水上泰延

私は 1994 年 4 月医局長となり、以前よりいろいろな病院から病院誌が送られてくる度に当院も発刊したいという思いが強かったことより、1 年後に発刊することを一大公約として、準備に取り掛かりました。今まで貴重な症例を多数経験し、学会発表も数多く行ってきました。しかし、忙しい日常生活のため論文という形にすることができず、貴重な症例もいつの間にか風化し脳裏から消えていきました。このことが繰り返されることが口惜しく思い、何とか貴重な症例に日の目を見せたいという思いが発刊の動機となりました。

また、その病院の評価の一つとして、学会発表の数、論文の数があげられます。

しかし、ただ学会で発表しても論文にしなければ何の業績にもならないと考えました。権威ある雑誌の投稿となりますとなかなか筆が進まないのが現状と思い、ここで書く習慣をつけてもらい、いろいろな雑誌に投稿するきっかけになってもらいたいと考えました。

ISSN (International Standard Serial Number: 国際標準逐次刊行物番号)を取得し、国立国会図書館に提出することによって、文献検索で拾い上げられるようにしました。創刊号には私も日本胆道外科研究会で発表した「腹腔鏡下胆嚢摘出術で経験した肝外胆道走向異常症例の検討」の論文を掲載しました。

年報を発刊したことを記念して、1995 年 9 月に遠州総合病院年報記念講演会を開催しました。「がんの告知について」をテーマとして、シンポジウムを行いました。病院外より開業医、法曹界の考え方として弁護士、ホスピスの看護師の立場から、当院からは告知する側の医師、告知後のケアが中心とする看護師、院内の体験者（患者として告知を受けた人、告知するかどうか迷った家族の方）それぞれの立場から話をしてもらいました。特に家族の方の話の時は会場が張り詰めた雰囲気になったことを思い出します。その当時は早期癌に対しては告知するが、進行癌に対してはまだまだ告知はなされていない時期でした。このシンポジウムを通して、癌の告知の問題点が浮かび上がり、病院における今後の告知を進めるにあたっての多くの示唆をいただきました。自分が癌の時は告知してほしいが、家族が癌の時は告知してほしいというのが大方でした。

そこで本人に「癌であった場合は告知してほしいか」というアンケートを前もって取り、本人に告知の希望があることを説明して告知するようになったことを覚えています。ご家族が本人に告知することなく最期を迎えられるまでの葛藤が綴られている文章を今改めて読み返してみると、涙が出る思いです。また、その当時問題になったことは、告知後の本人・家族への精神的なケアでした。2002 年に医師・看護師・薬剤師・臨床心理士・栄養士などが集まり、緩和ケアチームを結成しました。癌疼痛に対する治療が医師によりまちなちであったことより、WHO に基づいた癌疼痛マニュアルを作成し、麻薬を用いた疼痛のコントロールや精神的苦痛に対する早期からの介入を心掛けました。

遠州総合病院年報記念講演会が盛況であったことより、一回で終わるのではなく毎年一般市民・開業医の先生方を対象にして、学術講演会を開催しようということとなりました。私が病院長になった 2005 年に第 11 回学術講演会として諏訪中央病院の鎌田實先生をお招

きして、「地域で命を支えること」をテーマでお話をしていただきました。その時すでに鎌田實先生は著名人でとても忙しい先生でしたが、私の大学時代の親友が同じ病院で院長補佐として勤務していたことより頼んで来ていただきました。座る席がないくらい非常に多くの方に来ていただいたことを覚えています。第 12 回は、ニュースキャスターの逸見政孝さんの奥さんでエッセイストある逸見晴恵さんを迎えて「私のがんを恐れなくなった理由(わけ)」というテーマで癌の患者さんを抱えた家族の立場で講演をしていただきました。1993 年 9 月 25 日に逸見政孝さんは自分が癌であることをテレビで記者会見したことを今でも鮮明に覚えています。13 回忌の模様をスライドで映しながら癌の告知に関して家族で非常に悩まされたこととお話されました。また、セカンドオピニオンの必要性を痛感したことと、自分も子宮癌になってセカンドオピニオンを積極的に行い、治療されたことも話されました。

時代の流れによって、今ではセカンドオピニオンや癌の告知は当然のようになされ、インターネットによって様々な情報を得ることができるようになり、選択肢が増えました。もし自分が癌であったならば、告知をしてもらい、死を迎えるまでに何ができるのか、納得の生き方をしたいと考えるようになってきたのだと思います。しかし、心のケアはまだななのかもしれません。

毎年継続してきたことにより、今年で第 20 回の学術講演会を開催することとなりました。年報には毎回前年度の学術講演会の記録を掲載しており、第 21 巻の年報を出版の運びとなっています。当初の私の思いは継続しています。一代目の編集委員長は私でしたが、今は四代目の内科医師が引き継いで、素晴らしい年報に仕上げられています。学術講演会はいつもテーマを決めることに難渋します。初代講演会運営委員長は私が行いましたが、非常に苦勞したことを覚えています。今は三代目の消化器内科の副院長にお願いしています。年報も学術講演会も遠州病院の歴史です。今後も継続することによって病院の歴史を刻んでいきたいと思っています。

